

小説で街を改変する気概で――

もう一つの現実を観る視線で書く

いま、最も読みたい作家と呼ばれる芥川賞作家・田中慎弥さんは、山口県下関市の高校を卒業後、現在も下関で暮らして創作を続けている。生まれ育った海峡の都市を「乾いた街」と表現する田中さんに、下関に寄せる思いや、創作の姿勢を聞いた。

作家

田中慎弥

●たなか・しんや 1972年山口県下関市生まれ。2005年「冷たい水の羊」で新潮新人賞、08年「蝸」で川端康成文学賞、「切れた鎖」で三島由紀夫賞を受賞。12年「共喰い」で芥川賞を受賞した。最新刊に『田中慎弥の掌劇場』（毎日新聞社）、「これからもそうだ。」（西日本新聞社）。

地にうごめいている人間を書く

――芥川賞受賞作『共喰い』をはじめ、作品に郷愁が横たわっていますね。

ノスタルジーや実体験を前提にしているわけではありません。それに寄りかかると危ないんです。何か現実を起こったことを下敷きになると、その現実の重さに影響されますから。だから計算はしていないのですが、舞台上に手を加える中で、結果的にノスタルジーが

浮かび上がっているのかもしれないですね。

――下関は歴史の重要な転換点で必ず表舞台に登場してきた街です。

そういう歴史的な背景などを子供のころから、いやというほど聞かされ続けてきました。しかし、それはもういいというのが私の考えです。極端な話、下関に政治家など一人もいない（笑）。それはどこかで勝手にやってくればいい。それらと切り離したところで小説を書いています。あるいは切り離す作業を、ずっと継続してやっている感じです。

――政治や実学方面に興味がないということですか。違います。それは厳然と大きな存在として、もともとそこにあるものですから。ただ自分はそのどこどぶり浸かることはしたくないんです。もちろん政治的意図で作品を書くことはありませんし。源平合戦も巖流島の決闘も幕末維新もこの地で起こった大きな事件ではありますが、それは昔の話でしょ？ と。それとは

一定以上の距離をおきたい。その距離感そのものが小説になるのだと思います。

――作中で「下関」の名が出てきたことはありません。それには、はっきりと意図があります。「下関」と表記したとたん、まさに現代の話になり、さまざまに現実引つ張られそうになる。ありえない街での、ありえない時間をつくることで、私の小説が動き出します。だから下関ではなく、旧名の「赤間関」。そのほうが字面も響きもかっこいいと、単純にそう感じています。――会見などで、現実の下関を「乾いた街」と表現されましたね。

かつて捕鯨や漁業、流通などで栄えましたが、自分が生まれたときには繁栄の時代はとくに終わっていません。読み知ったり、伝え聞いたりするだけです。なのに潤いは去っても、人は住み続けています。ある意味、際限なく終わり続けている街、空洞化した街。そのことを乾いた街、と自分の言葉で表現しただけです。勤めた経験がないから住民の気質まではわかりませんが、一般的に向上心らしきものはないのかもしれないのですが、なして生きられるのなら、それでいいのではないのでしょうか。命がけでなくても生きられ

